

国 語 科

ことばを豊かに感受し、表現を楽しむ子どもの育成

～ことばへの関心を高め、主体的にかかわる授業の展開～

昨年度に引き続き、子どもたちが、「できた!」「分かった!」「楽しい!」と思える国語の授業を目指してきました。今年度は特に、子どもたちがことばを活発に表出し、互いにかかわりながら学び合える授業づくり、学んだことを次の学びに活かせる授業づくりの2点から、研究主題に迫れるよう実践を積んできました。(国語科主任 皆川 美弥子)



1 研究の経緯

昨年度より、本校の研究主題「学びを楽しむ子どもを育てる」を受け、国語部では研究主題を「ことばを豊かに感受し、表現を楽しむ子どもの育成」として研究を進めてきた。「ことばを豊かに感受し」とは、「ことばそのものや文章表現の魅力を味わいながら、題材をもとに考えを深めること」であり、「表現を楽しむ」とは、「身に付けたことばの力を発揮し、主体的に言語活動を営むこと」であると考えられている。そして昨年度は、この研究主題に迫るために、副主題を「ことばへの関心を高め、ことばの力を明らかにする授業の構想」として実践を行い、主に以下の成果と課題があった。

- 魅力ある教材を単元化し、学習の見通しを持たせ、言語活動への興味を引き出す支援をすることにより、ことばへの関心を高め、学習への期待感を抱かせることができた。
- 身に付けさせたいことばの力を明らかにした単元構成や言語活動を仕組むことで、子どもは新たな発見をしたり、思考の深まりを感じたりすることができ、国語の学習を楽しむ姿が見られた。
- △ ことばへの関心をさらに高め、学び合いの土壌作りをすることで、教材や友達とより主体的にかかわりながら言語活動を展開し、国語を学ぶことの楽しさを実感することができるようにする。
- △ 子どもが学習を通して得た力を他の場面(他単元、他教科、実生活)で生かすことができる言語活動を意図的・計画的に展開することで、国語を学ぶことの充実感を得られるようにする。

2 全体提案との関連

研究主題「学びを楽しむ子どもを育てる」、今年度の副主題「子どもが学びの楽しさを味わう授業を創る」を受け、国語科における学びの楽しさを次のようにとらえた。

ことばの魅力を味わいながら、自分のことばの力の向上を目指していこうとすること

※ ここで言う「ことばの力」とは、「他者のことばを受け止めて理解する力、自分の考えをことばで伝える力」ととらえる。

この楽しさを味わう授業を創るために、全体提案の3つの研究内容と以下のように関連を図った。

(1) 楽しさを味わうストーリー性のある展開の工夫

国語科における「ストーリー性のある展開」とは、ことばへの関心を高めるテーマをもとに、「問い」を解決しながら言語活動を繰り返し、ことばの力を付けていくことであると考えた。「問い」とは、題材に出会った子どもたちから生まれた疑問や子どもたちが抱いた関心を大切にしながら、教師が意図的に設定した発問や条件提示である。期待感を持ってそれらの「問い」と出会い、解決した充実感を味わうことで、子どもたちが学びの楽しさを実感できるようにしてきた。

例) 2年生 話・聞「おもちゃまつり」

テーマ おもちゃまつりをひらこう

問い(条件提示) 言語活動

提示されたメモをもとに 説明1

↓

説明の型に合わせて 説明2

↓

自分の考えた順序で 説明3

↓

おもちゃまつりの発表 説明4

ことばの力 順序よく説明する力

(2) 自分の考えやイメージを分かりやすく伝え合う力の育成

自分の中で構築した考えや思い描いたイメージを他者に伝えるためには、ことばが有効な手段

となることは言うまでもない。しかし単なることばの羅列だけでは、相手に受け入れてもらうことは難しい。そこで国語部では、相手とかかわりながら考えやイメージを十分に交流することができるような「ことばで伝える力」の育成を目指した。具体的には研究の内容(1)で後述しているように、考えを深め合う話合いのための支援や、相手意識や目的意識を持った、声による表出活動について研究してきた。

(3) 学んだことを納得できる学習内容の整理

授業や単元を通して身に付ける「ことばの力」を子どもが意識し、次の学習や他教科での学習で活用できるようにすることが、学習内容を整理し、学びを納得することであると考えた。そこで、身に付けるべき国語科の知識・技能の蓄積と、身に付けたことを活用できる授業展開の工夫について研究してきた。これらは研究の内容(2)と関連し、後述する。

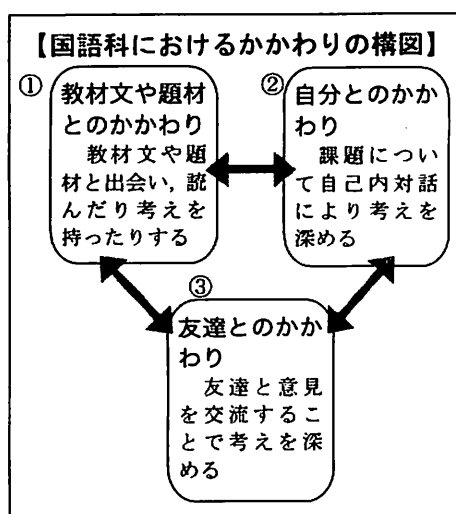
3 研究の方向

昨年度の研究の経緯や全体提案を受け、今年度の研究副主題を以下のように設定した。

【研究副主題】ことばへの関心を高め、主体的にかかわる授業の展開

「ことばの魅力を味わいながら、自分のことばの力の向上を目指していこうとする」という国語科の学びの楽しさは、子どもたちがことばへの関心を高く持ち、ことばにこだわって考えたり、ことばを吟味しながら伝えたりする姿に表れる。そしてそれは、①魅力的な教材文と出会い、それを味わったり、それをもとに考えようとしたり、②他者のことばをどのように理解すべきか、自分の考えをどのように伝えるべきか自己内対話を繰り返したり、③友達との伝え合いにより自分の考えを深めたりすることで実現できると考えた。さらに、これら3つのかかわりを単独で行うのではなく、右図に示すように、互いに関連し合うように授業を展開することで、自分の考えを深め、ことばの力の向上を目指すことができるのではないかと考えた。

そこで、ことばへの関心を高め、題材、自分、友達と主体的にかかわりながら考えを深める授業を展開するために、今年度は、以下の2点から授業づくりをしてきた。



【研究の内容】(1) ことばを活発に表出し、学び合う授業づくり
(2) ことばの学びをつなげる授業づくり

4 研究の内容

(1) ことばを活発に表出し、学び合う授業づくり

自ら考え、学びを楽しむためには、子どもたちが常に学びの主体者となる必要がある。国語科において「学びの主体者となる」とは、「ことばを活発に表出し理解し合う」ことに他ならない。互いにかかわりながら、表出したことばを理解し合うことで、それぞれの考えが深まり、集団としての学びが高まっていくと考える。そこで、互いの考えを深め合うための話合いの支援について研究を進めてきた。また、音読を中心とした声による表出活動についても実践してきた。

ア 考えを深め合う話合い

話合いという学習活動は、各教科等の言語活動の中心である。話合いの力を育てることは、国語科の大切な役割でもある。また、話合いの力を育てることで、子どもたちは、ことばによる伝え合いの楽しさを実感したり、学ぶことの楽しさを味わったりすることができるであろう。

そこで、先に示した三つのかかわりの中の「友達とのかかわり」に焦点を当て、互いの考えを十分に交流できるようにしてきた。また、「友達とのかかわり」によって、自分の考えをとらえ直したり、自分の考えを確かなものにしたりするために、話合いの中で「自分とのかかわり」「教材文や題材とのかかわり」を意識できるようにしてきた。具体的な支援は、以下の通りである。

- 話し合う必然性の生まれる課題を設定し、活発な意見交換ができるようにする。その際、ペアやグループでの話合いに入る前にクラス全体で論点を明らかにし、共通の土俵をつく

ることで、各自が自分の意見を持った上で話し合えるようにする。

- 発達の段階に応じて、以下のような話し合いの方法を明らかにし、全員参加の話し合いをうながす。

- ・ 話し合う時間（時間内に結論を出す、時間いっぱい考えを深め合うなどの条件提示）
- ・ 話し合う目的、項目（何のために、何について話し合うかの明確化）
- ・ 役割（司会者、記録者の有無）
- ・ 発言の順序（どんな順で発言し、発言者に対してだれがどんな順で対応するか など）

- 子どもが話し合いの成果や有効性を実感できるよう、以下の支援を行う。

- ・ 優れた発言や向上した姿を教師が具体的に賞賛する。
- ・ グループごとに話し合いの成果を報告し合ったり、自己評価、相互評価したりする機会を設け、解決した内容や深まった考えを明らかにすることで、自分たちの話し合いに責任が持てるようにする。また、教師はそれを適切に評価する。
- ・ 話し合ったことをもとに、再度自分の考えをとらえ直す機会を設けることで、考えの深まりを実感したり考えに確信を得たりできるようにする。
- ・ ノート記述を重視し、話し合いに入る前に自分の意見を記述するだけでなく、話し合いの経過や話し合いで得たことについてもノートに記録するよううながす。教師は子どものノートを見取り、話し合いの成果や意見の変容などについて賞賛する。

- 特に「話す・聞く」単元におけるグループの話し合いでは、話し合いのモデルを示し、それをなぞることで、右に挙げるような、話し合いに有効なことばを学べるようにする。また、話し合いのモデルをもとに、具体的な課題の解決方法を学ぶことができるようにする。話し合いのモデルは、実際に教師が演示したり、発言内容を台本で提示したりする。

【話し合いに有効なことばの例】

- ・ 比較 ～と～を比べると
 ～の方が
- ・ 因果 わけは～だから
 どうして～なのか
- ・ 例示 例えば～
 ～の場合
- ・ 仮定 もし～なら
 たとえ～でも
- ・ 推測 もしかすると～
- ・ 補充 付け足すと～
 ほかにも～
- ・ 結論 つまり～
 このように～

実践例 2年生「あそぼうグランプリ！」

教材文「せかいのかくれんぼ」をもとに、班で考えた遊びをクラス全体に提案し、グランプリを選ぶという単元を仕組んだ。より楽しい遊びを考えるための班ごとの話し合いでは、モデルを台本で提示し、役割読みを繰り返したり、台本の中の発言のよさや改善点について考えたりすることで、話題に沿って話し合うために有効なことばを学ぶことができた。

イ 声による表出活動

ことばは、同じ文字の連なりでも、リズムや抑揚によって伝わる意味が違ってくる。リズムや抑揚を表現できる「声による表出」は、書きことばに比べ、より目的意識や相手意識が必要とされることがある。また、リズムや抑揚を感じながら声でことばを表出し、相手に届けるという活動の楽しさは、国語科ならではのものである。そこで、声による表出活動の実践を進めることで、伝える力の育成や、国語を学ぶ楽しさの実感につなげることができるようにした。

具体的には音読の意義を以下の3点からとらえ、単元や授業の中に意図的に位置付けた。

- 授業の雰囲気づくりのための音読…教材文、詩歌などを友達と声を合わせて音読することで、連帯感を生み、学びの雰囲気をつくる。
- 内容理解のための音読…教材文を声に出して読むことで書かれた内容を理解したり、友達の音読を聞いて、自分の読みと比べたりすることができる。低・中学年では、動作化や劇化を取り入れることで、書かれた内容を、体を使って読み取っていけるようにする。
- 内容表現のための音読…読み取ったことや読み味わったことを音読で表現する。その際、発声法やことばのリズム、抑揚などにも気を配り、声による表現を楽しめるようにする。読み取ったことについて話し合い、群読や語りで表現する活動も取り入れる。

(2) ことばの学びをつなげる授業づくり

題材ごとに身に付けた力を一般化し、他の題材や他教科で活用できるようにすることで、学びの成果を実感できれば、子どもは国語を学ぶことにやりがいを持ち、楽しさを感じるであろう。そこで、活用できる知識や技能を蓄積し、それらを生かす授業展開や単元展開について研究を進めてきた。

ア 活用できる知識・技能の蓄積

その単元や題材で身に付けるべきことばの力を教師が明確に把握するとともに、他の単元や他の教材文でも活用できる知識や技能を子どもに意識させ、自分にことばの力が身に付いていくことを実感できるようにした。具体的には、次の2点を意識して授業づくりをしてきた。

- その単元で使う学習用語（対比・比喻など国語の学習に必要な概念を指した用語）を意図的に提示し、子どもがその概念を「活用できる知識」として意識できるようにする。

実践例 1年生「おとうとねずみチロ」

「登場人物」「クライマックス」という学習用語を提示した。「クライマックスとは、物語が最も盛り上がるところで、事件が解決したり、登場人物が変容したりするところである」ということを押さえ、「クライマックスはどこか」という学習課題を解決することで、物語の展開や登場人物の変容を読み取ることができた。さらに、次の物語文の単元でも、これらの学習用語を使って子どもたちの読みの交流ができるようにした。

- 授業の中で、問いを解決するために用いた技能を一般化して整理できるよう支援することで、子どもがそれを「活用できる技能」として意識できるようにする。

実践例 3年生「しぜんのかくし絵」

段落ごとの内容を読み取る学習を通して、『このように』という語の後には要約された文がある。』『トノサマバッタは～』『ゴマダラチョウの幼虫は～』など、主語に着目すると事例がとらえやすい。』など、読み取り方の技能についても意識してノートにまとめさせた。

これらのことは、子ども個人がことばの力として実感し、「教材とかかわる」際に有効に機能するだけでなく、集団で学ぶときには共有された知識や技能として機能する。つまり、子どもどうしが学習用語や一般化された技能を用いながら共通の土俵でかかわり合い、学び合うことができるのである。

イ 学んだことの活用をうながす授業展開

蓄積した知識や技能は、活用の場が与えられることで、子どもの中で整理され納得できる。

そこで、学んだことを生かす場を教師が意図的に設定したり、学びのつながりを子どもが意識できるような支援を行ったりすることで、ことばの学びを実感し、主体的に言語活動に取り組むことができると考え、次の2点から実践を行った。

- ことばへの関心を高めるテーマのもと、問いを解決しながら言語活動を繰り返す「ストーリー性のある展開」を意図した単元をつくる。子どもは、少しずつ難易度が上がったり、観点が変わったりする言語活動を繰り返す中で、学んだことを活用し、自分のことばの力の向上を実感することができる。

実践例 6年生「俳句を読もう」

「夏草や兵どもが夢の跡」の俳句を、対比の構造を生かしながら読み解き解釈文を書いた。その際、切れ字の効果についても学習し、感動の中心について話し合いをした。この学びを生かし、続く「静けさや岩にしみいる蟬の声」「古池や蛙飛び込む水の音」の解釈文を書く活動を繰り返すことで、学んだことを活用し、自分の力で書けるようになることを実感させた。

- 単元の中で身に付けたことばの力が、他単元、他教科におけるどのような言語活動を支える力になるのかを教師が把握し、具体的に提示することで、子どもがそれを意識しながら、他単元、他教科の学習に取り組めるようにする。

実践例 2年生「おもちゃまつり」→生活科「思いっきりカーニバル」→「わたしの見学ノート」

「おもちゃまつり」で身に付けた「おもちゃの作り方を順序よく説明する力」は、他教科での「学習内容を筋道を立てて説明する力」を支える力となる。生活科の「思いっきりカーニバル」で遊びを紹介するときに、「順序を表すことばを使う」「初めに概要を伝えてから詳細を伝える」などの技能を具体的に提示した。また、同じ技能を「わたしの見学ノート」で、宇都宮駅探検の記録文を書くときに活用できるようにした。

5 成果と課題

2つの研究内容を通して、教材文や友達との主体的なかかわりを意識した授業づくりを進めることで、子どもたちは、ことばにこだわって考えたり、ことばを吟味して伝えたりしながら学びを楽しむことができた。今後は、国語を学ぶよさや楽しさを実感できる単元づくり、授業づくりをさらに研究するとともに、友達との多様なかかわりにより自らのことばの力の向上を実感できる支援の在り方について考えていきたい。